OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	中国新疆都市部におけるウイグル人女性の言語使用状況に関する調査 : 北新疆のウルムチ市、グルジャ市と南新疆のカシュガル市、ホータン市を事例として
Author(s)	買蘇提, 希日娜依; 大谷, 順子
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2018, 44, p. 263-279
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68301
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国新疆都市部におけるウイグル人女性の言語使用状況に関する調査
―北新疆のウルムチ市、グルジャ市と南新疆のカシュガル市、ホータン市を事例として―

シェリンアイ・マソティ（希日娜依・買蘇提），大　谷　順　子

目　次

１．はじめに
２．調査概要
　２－１　調査地
　２－２　調査対象
　２－３　調査方法
３．ウイグル人女性の言語使用状況
　３－１　言語能力
　３－２　家庭内の言語使用状況
　３－３　家庭外の言語使用状況
　３－４　読む、見る、書くときの言語使用状況
４．南新疆と北新疆のウイグル人女性の言語使用状況の共通点と差異
　４－１　共通点
　４－２　差異
５．おわりに

中国新疆都市部におけるウイグル人女性の言語使用状況に関する調査
—北新疆のウルムチ市、グルジャ市と南新疆のカシュガル市、ホータン市を事例として—

シェリンアイ・マソティ（希日娜依・買蘇提），大　谷　順　子

1．はじめに

中国は多民族国家である。各民族がお互い交際する際、各々の言語間の接触を伴い、必ず各民族の言語使用に影響を与える。本稿で取り上げる新疆はユーラシア中部、中国の西北部に位置し、北はアルタイ山脈、南は崑崙山脈によって挟まれ、中央を貫く天山山脈によって大きく２つの地域に分けられている。天山山脈以南の地域は南新疆と呼ばれ、天山山脈以北の地域は北新疆と呼ばれている。新疆は多くの民族が集住している地域である。ウイグル、漢、カザフ、回、キルギス、モンゴル、タジク、シボ、ウズベク、タタール、ロシア、ダフールなど民族が居住しており、2012 年の統計では、新疆の総人口は 2181,58 万人、ウイグル人は 1017,15 万人で、総人口の 46.6%を占める、漢族は 832,29 万人で、総人口の 38.2%を占める。[1]　ウイグル族は古来より自分の言語と文字を持っていて、現在使用しているウイグル語は、アルタイ語系のチュルク語族に属する現代ウイグル語であり、文字はアラビア文字を基礎にしたピンイン文字である。

「中国少数民族言語使用状況」では、新疆のウイグル人のうち約 5.7 万人は漢語の言語能力を持ち、その人口はウイグル族人口全体の 0.9%を占める、その中で大多数の人が幾らかの日常用語だけを話せる、新疆ウイグル自治区ではウイグル語の使用範囲はほかのどの言語よりも広いと指摘される。[2]

しかし、90 年代末、2000 年代初頭から、漢族人口の増加とバイリンガル教育の推進はウイグル人の言語使用状況に影響を与えた。特に、改革開放の後、西部大開発、都市化の進行に伴い、新疆の都市部でウイグル語と漢語の接触はこの地域の人々の生活における言語活動の重要な要素となってきた。これらは、各民族の言語使用状況の変化を促した。言語使用上のこのような変化に伴って、近年、ウイグル人の言語使用状況に注目した研究が行われ、その研究成果が発表されはじめてきた。この中で、重要な先行研究の一つは、王远新のハミ地区、グルジャ市の各民族の言語使用特徴に関する研究（1998, 2000）及びカシュガル市高台民居（Kozichi Yar Béshi olturaq rayoni）居民の言語生活に対する調査（2013）である。また、孟红莉（2013, 2016）の研究はグルジャ市，ウルムチ市で行った居民の言語能力、言語使用、言語態度に対する調査である。热孜婉 · 阿瓦穆斯林（リズワン · アワミセリム）（2014, 2015）の研究はウルムチ市、ハミ市、カシュ

ガル市のウイグル人居民のウイグル語と漢語能力、言語使用現状及び態度に関する調査である。これらの研究では新疆におけるウイグル人の言語使用状況に関する成果が多く報告されているが、今まで新疆の都市部におけるウイグル人女性の言語使用状況に注目し、調査研究を行った研究の報告はなかった。従って、本調査ではウルムチ市、グルジャ市、カシュガル市およびホータン市におけるウイグル人女性の言語使用状況に対し調査を行い、ウイグル人女性の常用言語は何か、使用時に最も自在に感じる言語は何か、家庭内と家庭外の言語使用状況はいったいどうなっているか,「読む」、「見る」、「書く」ときの言語使用それぞれについて明らかにして、ウイグル人女性の言語使用特徴を要約したい。ここで、「読む」とは、新聞、雑誌、本を読むことであり、「見る」とは映画やテレビ番組を見ることである。この調査は、ウイグル人女性の言語使用の現状を知る上で、極めて貴重なデータを提供することになり、今後の言語使用に関する研究の促進と広がりに意義をもつ。

２．調査概要

新疆は広大な地域であり、内部の地方ごとの人口分布には大きなばらつきがある。民族構成が複雑であるため、地方により経済、社会や文化の発展の程度が不均衡である。そこで、本調査は、ウルムチ、グルジャ、カシュガルおよびホータンという 4 つの都市を調査地として選んだ。この 4 つの都市で生活している一部のウイグル人女性を調査対象とし、2010 年 8 月～ 9 月まで現地調査を行った。

2-1. 調査地

（1）ウルムチ市

ウルムチ市は新疆ウイグル自治区の首府であり、天山山脈北麓のジュンガル盆地東南縁に位置する。ウルムチ市には漢族、ウイグル族、回族、カザフ族、モンゴル族、ウズベク族、タタール族、キルギス族、タジク族、シボ族、ロシア族、ダフール族など多くの民族が居住している。2010 年、全市総人口の中で、漢族は 1,754,100 人、総人口の 72.17%，ウイグル族は 315,017 人、総人口の 12.96%，回族は 250,933 人、総人口の 10.33%，カザフ族は 66,958 人、総人口の 2.76%，ほか 43,307 人、総人口の 1.78% を占めていた。[3)]

（2）グルジャ市

グルジャ市は新疆ウイグル自治区イリ・カザフ自治州の首府であり、天山山脈の南西側に位置する。2010 年末、全市総人口 471,462 人。グルジャ市内に 37 の民族が居住している。その中で、ウイグル族は 232,998 人、総人口の 49.4%，漢族は 164,567 人、総人口の 34.9%，カザフ族は 21,384 人、総人口の 4.5%，回族は 35,099 人、総人口の 7.4%，ほか 17,414 人、総人口の 3.7%を占めていた。[4)]

（３）カシュガル市

カシュガル市は中国最西端の町であり、天山山脈の麓に位置する。国家歴史文化名城に指定されている。カシュガル市にウイグル族、漢族、回族、キルギス族、カザフ族、モンゴル族など多くの民族が居住している。2011 年、全市総人口 480,202 人、その中、ウイグル族は 393,791 人、総人口の 82.01%，漢族は 81,881 人、総人口の 17.05%，ほか 4,530 人、総人口の 0.94%を占めていた。[5)]

（４）ホータン市

ホータン市はタリム盆地の南、崑崙山脈の北麓に位置している。主に、ウイグル族が居住している。2010 年、全市総人口 318,063 人、その中、ウイグル族は 281,509 人、総人口の 88.5%，漢族は 35,272 人、総人口の 11.1%，ほか 1,282 人、総人口の 0.4%を占めていた。[6)]

2-2. 調査対象

（１）年齢

調査対象は年齢によって、18 － 29 歳、30 － 39 歳、40 － 49 歳、50 － 59 歳、60 歳以上と分けている。対象年齢は、主に 18 歳から 40 代までに集中している。すなわち、青年期と壮年期である。

（２）職業

調査対象の職業については、公務員、専門職、教師、学生、工場労働者、商人、その他等である。調査対象の職業分布は多様であり、このことにより結果の代表性も比較的高いものとなると考えられる。

（３）学歴

学歴をみてみると、教育を受けていない人、小学校卒業者、中学卒業者、高校卒業者、中等専業学校卒業者、高等専業学校卒業者、大学卒業者、修士課程修了者等である。その中、高等専業学校以上の学歴を持つ調査対象は 67%を占める。全体として、比較的学歴が高いという特徴がある。

2-3. 調査方法

（１）質問紙調査

配布された質問紙調査票は合計で 800 部、そのうち回収された質問紙調査票は 617 部であり、回収率は 77.1%である。

本調査は、ウイグル語の質問紙調査票を用意した。質問紙は、選択肢に答えるという形式であり、ひとつの質問に対する回答欄は、3 つから 6 つの選択肢からなっている。質問紙の質問項目は 56 個ある。全体は 2 つの部分に分かれており、第一部分は調査対象の属性（年齢、職業、学歴）であり、第 2 部分は 56 項目からなる選択式の質問紙調査票である。

（2）インタビューと参与観察

我々調査チームのメンバーは、各地域の職業、教育程度、年齢を区別し、言語接触の中に身を置いているウイグル人女性にインタビュー調査を行い、言語使用に関わる一次資料を取得することができた。実地調査の過程で注意深く観察を行うことを通じて、信頼の置ける貴重なデータを蓄積することができた。

（3）データ統計

本研究のデータにおける統計の処理には、SAS9.2 ソフトを利用し、データに対する分析を行った。四つの市の質問紙調査票について、統計分析を行った。

本調査において、方法論の側面から見ると、質問紙の策定、実施およびデータ統計は、ある程度の代表性、有効性、および信頼性を持っている。参与観察とインタビュー調査は、質問紙の策定やその後の調査活動の大きな助けとなり、本報告の学術的な価値を高める上で有効なデータを提供する。

3．ウイグル人女性の言語使用状況

ウイグル人女性の日常生活は主に家庭、学校、職場、社交場などで、付き合いは家族、クラスメート、同僚、友人あるいは他人である。ウイグル人女性の日常生活上の言語使用状況を明らかにするため、これらの交際場所と交際対象に対して調査を行った。

3-1. 言語能力

ここで言語能力とは、ウイグル人女性の普段は一番よく使う言語（常用言語）は何か、使う時最も自由自在に使えると感じる言語は何語か等を指す。質問に対し、ウイグル語、漢語、双語（バイリンガル）[7]、その他等 4 つの選択肢を提供した。

表 1：　ウイグル人女性の常用言語　（単位％）

選択肢 / 調査地	ウイグル語	漢語	双語	その他
ウルムチ市	67.9	5.7	23.6	2.8
グルジャ市	78.9	1.4	16.9	2.8
カシュガル市	71.6	4.1	23.2	1
ホータン市	78.3	1.7	20	0

調査の結果を見ると、大多数のウイグル人女性の常用言語はやはりウイグル語（自身の母語）である。だが、一部の女性は自身の母語以外にウイグル語と漢語を常に混ぜて使用する。漢語使用者はきわめて少ないことがわかった。

表 2：　最も自由自在に使えると感じる言語　（単位%）

選択肢／調査地	ウイグル語	漢語	双語	その他
ウルムチ市	81.1	0.9	14.2	3.8
グルジャ市	95.1	1.4	2.1	1.4
カシュガル市	84	5.2	9.8	1
ホータン市	93.7	0.6	5.7	0

大多数のウイグル人女性の最も自由自在に使えると感じる言語はウイグル語である。一部の女性はウイグル語と漢語を混用する時、最も自由自在に使えると感じると答えている、このような女性はウルムチ市で一番多くて、14.2%を占めた。グルジャ市では一番少なく僅か 2.1%を占めた。

3-2. 家庭内の言語使用状況

王恵氏は「家庭内において、家族と話す時、世代によって使用言語が異なるため、家族の身分を区分する必要がある」と指摘した [8)]。我々は家族を祖父母、父母、兄弟、親戚、配偶者、子供等に分類した。

本調査では、調査対象が相手（祖父母、父母、兄弟、親戚、配偶者、子供）に話しかけるときと話しかけられるときの使用言語に対し調査を行った。

表 3：　話しかけられるときの使用言語　（単位%）

質問	いつも耳にする言語				父母に話しかけられるとき				兄弟に話しかけられるとき			
選択肢／調査地	ウイグル語	漢語	双語	その他	ウイグル語	漢語	双語	その他	ウイグル語	漢語	双語	その他
ウルムチ市	86.8	1.9	4.7	6.6	91.5	0	0.9	7.5	83	0	7.5	9.4
グルジャ市	97.2	0	2.8	0	99.3	0	0.7	0	99.3	0	0.7	0
カシュガル市	92.8	0.5	6.7	0	97.4	0.5	1	1	88.1	1	10.3	0.5
ホータン市	98.9	0	0.6	0.6	98.3	0	1.1	0.6	96.6	0	2.9	0.6

家庭内において、大多数のウイグル人女性のいつも耳にする言語はウイグル語である。カシュガル市とウルムチ市には、兄弟に話しかけられるときウイグル語と漢語を混用する状況も見られた。この点では、ウルムチ市はほかの 3 つの市と差異が見られた。

表 4： 話しかけるときの使用言語 （単位%）

調査地／選択肢		ウルムチ市	グルジャ市	カシュガル市	ホータン市	調査地／選択肢		ウルムチ市	グルジャ市	カシュガル市	ホータン市
祖父母と	ウイグル語	92.5	100	97.4	98.9	祖父母と	ウイグル語	88.7	99.3	90.7	97.1
	漢語	1.9	0	0	0		漢語	0	0	1.03	0
	双語	0	0	1.5	0.6		双語	3.8	0	7.2	2.3
	その他	5.7	0	1.03	0.6		その他	7.5	0.7	1.03	0.6
父母と	ウイグル語	91.5	99.3	93.8	97.7	父母と	ウイグル語	80.2	90.1	84	88
	漢語	0	0	1.5	0		漢語	1.9	0	4.1	1.1
	双語	0.9	0.7	4.6	1.7		双語	8.5	2.8	8.8	6.9
	その他	7.5	0	0	0.6		その他	9.4	7.04	3.1	4
兄弟と	ウイグル語	86.8	99.3	88.1	96	兄弟と	ウイグル語	70.8	85.9	76.8	76.6
	漢語	0	0	2.1	0		漢語	0.9	0	5.2	1.1
	双語	5	0.7	9.8	3.4		双語	9.4	3.5	13.4	7.4
	その他	7.5	0	0	0.6		その他	18.9	10.6	4.6	14.9

家庭内において、大多数のウイグル人女性の家族に話しかけるとき使用言語はウイグル語である。この点では、兄弟より父母、父母より祖父母の間でウイグル語の使用が多く、また、子供より配偶者、配偶者より親戚の間でのウイグル語の使用が多いことが分かった。すなわち、話し相手が若い世代であるほどウイグル語と漢語の混用が多くなっている傾向が見られた 。

調査結果によると、家庭内において、ウイグル人女性の言語使用状況の特徴は以下の通りである。

第一に、家庭内において、ウイグル人女性の使用言語はウイグル語である。漢語の使用率は非常に低い。

第二に、ウイグル人女性の家庭内用語は主にウイグル語であるが、ウイグル語と漢語を混用する状況も見られた。特に、子供、配偶者、兄弟と話しするときウイグル語と漢

語を混用することが多い。

第三に、カシュガル市とウルムチ市の女性の中に、ウイグル語使用率の世代間差異が見られた。兄弟と話しするときウイグル語の使用率は祖父母、父母と話しするときより低い。

第四に、ウイグル人女性は家族に「話しかけるとき」でも、「話しかけられるとき」でも言語使用状況が相似している。

3-3. 家庭外の言語使用状況

この調査項目では、学校，職場，政府機関，銀行，社交娯楽場（劇場，レストラン，商店あるいはバザール）等での言語使用状況に対し調査を行った。

表 5： 家庭外で場所によって使用する言語 （単位%）

調査地	ウルムチ市				グルジャ市				カシュガル市				ホータン市			
選択肢／場所	ウイグル語	漢語	双語	その他	ウイグル語	漢語	双語	その他	ウイグル語	漢語	双語	その他	ウイグル語	漢語	双語	その他
学校	48.1	17.9	29.2	4.7	76.8	5.6	15.5	2.1	63.4	12.9	22.7	1	66.3	8	25.7	0
職場	40.6	28.3	21.7	9.4	51.4	19	23.2	6.3	49.5	14.9	35.6	0	57.1	10.9	25.7	6.3
政府機関	15.1	57.5	23.6	3.8	29.6	36.6	31	2.8	27.3	34.5	37.6	0.5	30.9	27.4	35.4	6.3
銀行	7.5	67.9	19.8	4.7	26.8	48.6	23.2	1.4	36.1	30.9	32.5	0.5	25.1	42.3	30.9	1.7
劇場	30.2	37.7	24.5	7.5	75.4	10.6	10.6	3.5	70.6	12.4	15.5	1.5	69.7	9.1	15.4	5.7
レストラン	63.2	8.5	22.6	5.7	74.6	3.5	21.1	0.7	82.5	2.1	14.4	1	87.4	1.1	11.4	0
商店あるいはバザール	16	21.7	50.9	11.3	34.5	10.6	53.5	1.4	40.7	8.8	49.5	1	42.9	5.1	52	0

（1）学校，職場

ウルムチ市では、学校でウイグル語を使用する者が 48.1%、漢語を使用する者が 17.9%、双語を使用する者が 29.2%を占めた。グルジャ市では、学校でウイグル語を使用する者が 76.8%、漢語を使用する者が 5.6%、双語を使用する者が 15.5%を占めた。この点において、北新疆のウルムチ市とグルジャ市には大きく差異が見られた。南新疆のカシュガル市とホータン市の状況は大体同様であった。

職場でいつも使用する言語について、使用率が最も高いのはウイグル語であった。次は、双語、その次は漢語である。ウイグル語の使用率が一番高いのはホータン市、漢語の使用率が一番高いのはウルムチ市、双語の使用率が一番高いのはカシュガル市であった。

（2）政府機関，銀行

政府機関でいつも使用する言語について、使用率が最も高いのは漢語であった。次は、

双語、その次はウイグル語である。漢語の使用率が一番高いのはウルムチ市、双語の使用率が一番高いのはカシュガル市、ウイグル語の使用率が一番高いのはホータン市であった。

銀行で通常使用する言語について、使用率が最も高いのは漢語であり、次は、2つの状況が見られた。ウルムチ市とホータン市では、双語の使用率がウイグル語より高く、グルジャ市とカシュガル市では、ウイグル語の使用率が双語より高い。漢語の使用率が一番高いのは北新疆のウルムチ市、ウイグル語の使用率が一番高いのは南新疆のカシュガル市であった。

（3）社交娯楽場

劇場でいつも使用する言語について、ウルムチ市で使用率が最も高いのは漢語であり、37.7%を占めた、次は、ウイグル語であり、30.2%を占めた、双語を使用する者が24.5%を占めた。グルジャ市、カシュガル市、ホータン市では、使用率が一番高いのはウイグル語であった。

レストランでいつも使用する言語について、ウイグル人女性の使用率が最も高いのはウイグル語であった。次は、双語、その次は漢語である。この点において、南新疆と北新疆には差異が見られた。

商店或はバザールで買い物するとき、ウイグル人女性の使用率が最も高いのは双語であった。次はウイグル語、その次は漢語である。この点において、ウルムチ市はほかの3つの市と差異が見られた。

調査の結果によると、家庭外において、ウイグル人女性の言語使用状況は場所によって変わることが分かった。学校や職場ではウイグル語の使用率が比較的高い。政府機関や銀行などの公的な場において、漢語と双語の使用が多い。劇場、レストラン等ではウイグル語の使用率が高い。南新疆と北新疆には差異が見られた。

家庭外において、ウイグル人女性の言語使用状況の特徴は以下の通りである。

第一に、ウイグル人女性の家庭内と家庭外での言語使用は大きく違う。

第二に、家庭外の公的な場においてはウイグル人女性の漢語の使用率が非常に高い。逆に、非公式な場においては、漢語の使用率は双語ないしはウイグル語と比べ明らかに低くなる。

第三に、新疆における社会環境の下で、ウイグル人女性がどの言語を選択してコミュニケーションをとるかは、その対象や場所と直接的な関係をもつ。比較的緩やかな環境の下では、例えば、学校、レストラン、劇場などの場所では、ウイグル人女性は母語を使うことを望む。いくらかの公的な場所、例えば政府機関、銀行などの場所では、話し相手となる対象と場所の特殊性による制約を受け、ウイグル人女性は漢語、もしくは双語を選択する傾向が強い。

3-4. 読む、見る、書くときの言語使用状況

この調査項目では、我々は、ウイグル人女性の「読む」、「見る」、「書く」ときの言語使用に対し調べた。

（1）読むと見るときの言語使用

新聞、雑誌、本をよむとき使用する言語について、4つの市のウイグル人女性の使用率が最も高い言語は違う。ウルムチ市とホータン市の女性の使用率が最も高い言語は双語であり、次は、ウイグル語であった。グルジャ市とカシュガル市の女性の使用率が最も高い言語はウイグル語であり、次は双語、その次は漢語である。この点において、4つの市には差異が見られた。

映画やテレビ番組を見るとき、ウイグル人女性の使用率が最も高い言語は双語であり、次はウイグル語、その次は漢語である。この点において、4つの市には差異が見られた。

表6： 読む、見る、書くとき使用する言語 （単位%）

調査地	ウルムチ市				グルジャ市				カシュガル市				ホータン市			
選択肢＼項目	ウイグル語	漢語	双語	その他	ウイグル語	漢語	双語	その他	ウイグル語	漢語	双語	その他	ウイグル語	漢語	双語	その他
新聞	36.8	1.9	51.9	9.4	58.5	3.5	35.9	2.1	54.1	4.6	39.7	1.5	43.4	2.9	51.4	2.3
本、雑誌	38.7	3.8	50	7.5	62	4.9	33.1	0	56.2	2.6	39.7	1.5	38.3	5.1	54.9	1.7
映画、テレビ番組	21.7	13.2	60.4	4.7	48.6	6.3	45.1	0	35.6	7.2	54.1	3.1	26.3	9.1	63.4	1.1
メール	41.5	39.6	10.4	8.5	61.3	16.2	19.7	2.8	49	31.4	14.4	5.2	39.4	26.9	24	9.7
携帯メール	9.4	62.3	22.6	5.7	41.5	28.2	26.8	3.5	30.4	44.3	20.1	5.2	10.9	67.4	19.4	2.3
手紙	72.6	2.8	12.3	12.3	90.1	4.2	4.9	0.7	77.3	12.9	7.7	2.1	81.1	5.1	10.3	3.4
商店あるいはバザール	16	21.7	50.9	11.3	34.5	10.6	53.5	1.4	40.7	8.8	49.5	1	42.9	5.1	52	0

（2）書くときの言語使用

科学技術発展の進歩に伴って、ウイグル人女性の中で、パソコンやネットを使う人が増えた。携帯電話の使用も頻繁になってきた。手紙を書くことも電子メールにかわってきた。では、このような環境の中で、ウイグル人女性の書くときの言語使用状況はいったいどうなっているか、これに対し、我々はウイグル人女性の手紙やメール、携帯メールを書くときの言語使用について調べた。

電子メールを書くとき、ウイグル人女性の使用率が最も高い言語はウイグル語であり、次は漢語、その次は双語である。この点において、グルジャ市はほかの3つの市と差異

が見られた。

携帯メールを書くとき、ウルムチ市とホータン市のウイグル人女性の使用率が最も高い言語は漢語であり、次は双語、その次はウイグル語である。グルジャ市のウイグル人女性の使用率が最も高い言語はウイグル語であり、次は漢語、その次は双語である。カシュガル市のウイグル人女性の使用率が最も高い言語は漢語であり、次はウイグル語、その次は双語である。この点において、各市に差異が見られた。

手紙を書くとき、ウルムチ市、グルジャ市、ホータン市のウイグル人女性の使用率が最も高い言語はウイグル語であり、次は双語、その次は漢語である。カシュガル市のウイグル人女性の使用率が最も高い言語はウイグル語であり、次は漢語、その次は双語である。この点において、カシュガル市はほかの 3 つの市と差異が見られた。

調査結果からみると、ウイグル人女性の読む、見る、書くときの言語使用状況の特徴は以下の通りである。

第一に、ウイグル人女性の中、本や新聞雑誌を読むとき、ウイグル語と双語の使用率が高い、漢語の使用率が非常に低い。映画やテレビ番組を見るとき、双語とウイグル語の使用率が高い、漢語の使用率が比較的低い。

第二に、大多数のウイグル人女性は手紙を書くときウイグル語を使用する。漢語の使用率が非常に低い。これに反して、携帯メールを書くとき、グルジャ市以外の女性は半分ぐらい漢語を使用する。メールを書くときもウイグル語の使用率が高い。

こうして見ると、家庭以外の環境において、ウイグル人女性の言語の使用習慣には 2 つの状況が見られる。公的な場では、漢語ないしはウイグル語・漢語の両言語を使うのが一般的である。逆に、非公式の場では、ウイグル語だけを使用するか、もしくはウイグル語と漢語を混用するバイリンガル現象がとくに顕著である。

４．南新疆と北新疆のウイグル人女性の言語使用状況の共通点と差異

4-1. 共通点

ウイグル人女性の言語能力について調べたところ、南新疆および北新疆でも同じく大多数のウイグル人女性の常用言語と最も自由自在に使えると感じる言語はウイグル語（自身の母語）であることが明らかになった。この結果は、リズワン氏のウルムチ市、ハミ市、カシュガル市におけるウイグル人市民を対象とした調査の結果と一致している。[9)]

ウイグル人女性の家庭内言語使用状況について調べたところ、南新疆でも、北新疆でも同じくウイグル語の使用率が非常に高いことが分かった。その中では特に、グルジャ市のウイグル人女性のウイグル語の使用率が高かった。この結果は、孟氏のグルジャ市とウルムチ市におけるウイグル人市民を対象とした調査の結果と一致している。[10)]

ウイグル人女性の家庭外での言語使用状況について調べたところ、南新疆でも、北新疆でも同じく学校や職場ではウイグル語の使用率が比較的高いことが分かった。その中

では特に、グルジャ市のウイグル人女性の学校でのウイグル語の使用率が高かった。この結果は、魏氏のウルムチ市、グルジャ市、カシュガル市におけるウイグル人中学生を対象とした調査の結果と一致していなかった。調査対象が違うため、調査結果は異なるのも必然であろう。[11)]

4-2. 差異

ウイグル人女性の家庭外での言語使用状況に差異が見られた。まず、政府機関において、南新疆と北新疆ではウイグル人女性の言語使用状況に差異が見られた。すなわち、北新疆では漢語の使用率が高い、南新疆では双語の使用率が高い。また、学校において、グルジャ市ではウイグル語の使用率が高かった。この点において、ウルムチ市はほかの市と比べて、ウイグル語の使用率が明らかに低い。北新疆のウルムチ市とグルジャ市に大きく差異が見られた。さらに、劇場において、ウルムチ市の言語使用状況はグルジャ市、カシュガル市、ホータン市と大きく差異が見られた。読むと見るときの言語使用において、ウルムチ市とホータン市の言語使用状況はグルジャ市、カシュガル市と比べて、差異が見られた。

5．おわりに

南新疆と北新疆は古来より自然環境、経済環境、生活習慣など様々な面で大きな差がある。本調査を通じて、南新疆と北新疆におけるウイグル人女性の言語使用状況に顕著な差異が存在しないことがわかった。南新疆と北新疆におけるウイグル人女性の言語能力と家庭内の言語使用状況は大体同じく、ウイグル語の使用率は非常に高い。家庭外の言語使用において、ウルムチ市はほかの市と差異が見られたのは、明らかに各地域の人口分布と一定の関係がある。

本調査の結果を整理する中で、言語使用状況の成因を分析するのは非常に複雑なものであることが確認された。さらに、研究プロジェクトにおいて、質問紙の質問項目の内容や、インタビューの内容で調整する必要がある部分が存在していることが明確になった。今後の研究の中で、インタビュー調査と豊富な参与観察を行い、理論面の検討を重視し、本研究を次の段階に展開させていく予定である。

謝辞

基金项目：本文系新疆普通高校人文社科重点研究基地新疆少数民族双语教育研究中心重点研究项目“新疆维汉语语言接触中的维吾尔族女性双语使用情况调查”（040414B02）的阶段性成果。（中国新疆科研費の研究成果である。）

中国国家留学基金管理委員会 (China Scholarship Council: CSC) の 2016 年度フェローシップ助成により、大阪大学外国人招聘研究員として研究の機会を与えられた。

注

1） 新疆ウイグル自治区統計局編（2012），『新疆統計年鑑―2012』，中国統計出版社，96, 110 頁
2） 中国社会科学院民族研究所等編（1994），『中国少数民族言語使用状況』，中国藏学出版社 , 40 頁
3） ウルムチ市統計局編（2013），『ウルムチ統計年鑑―2013』，中国統計出版社，96 頁
4） 新疆グルジャ市統計局等編（2011），『グルジャ市統計年鑑―2011』，グルジャ市統計局，67-70 頁
5） カシュガル地区統計局編（2012），『カシュガル地区統計年鑑―2012』，新疆統計印刷場，51 頁
6） ホータン地区統計局編（2011），『ホータン統計年鑑―2011』，ホータン地区統計局出版，80 頁
7） 双語というのは、ウイグル語と漢語を混ぜて話すことをさす
8） 王惠，鄭淑慧（2007），「能用华语是福气，别失去」（華語を使えるのは福、失わないで），徐大明『中国社会语言学新视角』（中国社会言語学新視角）南京大学出版社，47 頁
9） 热孜婉·阿瓦穆斯林（2015），「城市化进程中维吾尔族居民的语言使用现状调查」（アーバニズム過程におけるウイグル人市民の言語使用現状に関する調査），『新疆大学学報』第 1 期，134 頁
10） 孟红莉（2013），「新疆伊宁市维吾尔族城市居民的语言能力、语言使用与语言态度调查」（新疆グルジャ市におけるウイグル人市民の言語能力、言語使用及び言語態度に関する調査），『西北民族研究』第 3 期，98-99 頁
孟红莉（2016），「新疆乌鲁木齐市维吾尔族、汉族城市居民的语言使用与族际交往」（新疆ウルムチ市におけるウイグル族、漢族市民の言語使用と交際），『青海民族研究』第 1 期，67 頁
11） 魏炜（2013），「新疆跨民族交际外部语言环境与双语教育」（新疆民族間交際の外部言語環境とバイリンガル教育），『民族教育研究』第 5 期，101 頁

参照文献

[日本語]

新井凜子，大谷順子 (2016)，「新疆ウイグル自治区の漢語教育に見る言語とアイデンティティの関係」，『21 世紀東アジア社会学』第 8 号，日中社会学会，57-74 頁
真田信治，陣内正敬，渋谷勝己，杉戸清樹（1992），『社会言語学』，桜楓社
希日娜依・買蘇提（シェリンアイ・マソティ），大谷順子（2011），「新疆ウイグル自治区の特有群体「民考漢」―ウルムチ市のウイグル人を事例として―」，『中国 21』特集「民族と開発」第 34 号，281-302 頁
希日娜依・買蘇提（シェリンアイ・マソティ），大谷順子（2010），「中国新疆南部の農

村地域におけるウイグル人女性の教育情況に関する調査報告」,『九州大学アジア総合政策センター紀要』第 4 号，67-84 頁
リズワン・アブリミティ（热孜万 · 阿布里米提），大谷　順子（2014），「中国新疆におけるウイグル族の学校選択」，『21 世紀東アジア社会学』第 6 号，日中社会学会，156-171 頁

[英語]

Abulimiti, Reziwan and Otani, Junko (2015), Issues related to decisions on school selection for Uyghur children in Xinjiang, PRC, *Osaka Human Sciences*, Vol.1, pp.57-78.

[中国語]

中国社会科学院民族研究所等编（1994）,《中国少数民族语言使用情况》，中国藏学出版社
中国社会科学院民族研究所等编（1994）,《中国少数民族语言文字使用和发展问题》，中国藏学出版社
新疆维吾尔自治区统计局编（2012），《新疆统计年鉴—2012》，中国统计出版社
乌鲁木齐市统计局等编（2013），《乌鲁木齐统计年鉴–2013》，中国统计出版社
新疆伊宁市统计局等编（2011），《伊宁市统计年鉴–2011》，伊宁市统计局
喀什地区统计局编（2012），《喀什地区统计年鉴–2012》，新疆统计印刷厂
和田地区统计局编（2011），《和田统计年鉴—2011》，和田地区统计局出版
徐大明等（1997），《当代社会语言学》，中国社会科学出版社
郭熙（2004），《中国社会语言学》，浙江大学出版社
徐大明（2007），《中国社会语言学新视角》，南京大学出版社
王远新（1998），〈影响新疆哈密地区各民族语言使用特点的主要因素〉,《语言与翻译》第 2 期，8-14 页
王远新（2000），〈论我国民族杂居区的语言使用特点〉，《民族语文》第 2 期，1-7 页
王远新（2013），〈新疆喀什古城的语言生活——高台民居社区居民的语言使用和语言态度调查〉，《新疆社会科学》第 3 期，91-106 页
孟红莉（2013），〈新疆伊宁市维吾尔族城市居民的语言能力、语言使用与语言态度调查〉,《西北民族研究》第 3 期，91-106 页
孟红莉（2016），〈新疆乌鲁木齐市维吾尔族、汉族城市居民的语言使用与族际交往〉，《青海民族研究》第 1 期，64-71 页
热孜婉·阿瓦穆斯林，马琰（2014），〈城市化进程中维吾尔族居民语言态度的调查与分析——以几个调查点的现状为例进行对比〉，《西北民族大学学报》第 7 期，34-39 页
热孜婉 · 阿瓦穆斯林（2015），〈城市化进程中维吾尔族居民的语言使用现状调查〉，《新疆大学学报》第 1 期，131-137 页

魏炜（2010），〈维吾尔语在新疆跨民族交际中的使用情况探讨〉，《新疆社科论坛》第 2 期，83-88 页
魏炜（2013），〈新疆跨民族交际外部语言环境与双语教育〉，《民族教育研究》第 5 期，99-106 页
胡炯梅，彭凤（2010），〈新疆博尔塔拉蒙古自治州少数民族使用语言情况调查分析〉，《新疆职业大学学报》第 4 期，35-39 页
胡炯梅（2012），〈新疆博州地区不同性别的少数民族语言使用情况调查分析〉，《新疆教育学院学报》第 1 期，23-29 页
胡炯梅,汤允凤（2014),〈民族杂居区维吾尔族语言使用情况调查——以新疆博州为例〉,《新疆社会科学》第 3 期，140-144 页
李素秋（2008），〈在京就读维吾尔族大学生语言使用情况调查〉，《语言与翻译》第 4 期，34-38 页
赵平，张咏群（2011），〈乌鲁木齐维吾尔族汉语学习状况调查及分析〉，《新疆大学学报》第 6 期，134-138 页
赵平，廖冬梅（2015），〈新疆维吾尔族大学生语言使用状况调查分析〉，《新疆大学学报》第 3 期，140-144 页
王娟（2017），〈新疆维吾尔族大学生语言生活现状调查〉，《新疆师范大学学报》第 1 期，153-160 页
古丽扎尔 · 吾守尔（2006），〈喀什从商人员语言使用现状调查分析〉，《新疆职业大学学报》第 3 期，37-39 页
孙丽莉（2009），〈多元文化背景下新疆少数民族语言使用情况调查研究〉，《华中农业大学学报》第 4 期，108-111 页
赵江民（2006），〈城市化维吾尔族语言使用情况探究〉，《语言与翻译》第 3 期，28-31 页
希日娜依 · 买苏提，大谷顺子（2015）〈新疆维吾尔族女性维汉双语使用情况调查〉，《21 世纪东亚社会学》第 7 号，日中社会学学会，181-192 页

Survey on the language usage of Uyghur women in urban cities of the Xinjiang Region of China: Urumqi City and Ghulja City in North Xinjiang, and Kashgar City and Hotan City in South Xinjiang

Xirinayi Maisuti and Junko Otani

Abstract

Xinjiang is the region with the most frequent contact between languages in China. The existence of many kinds of languages and extensive exchanges between people of a multiethnic society provide a good “space” for contact between languages. Thus, contact between Uyghur and Chinese is an important component of language activity in the lives of people in the area. This affects the language use of each ethnic group.

The research was conducted on the linguistic situation of Uyghur women in the urban area of Xinjiang comprising Urumqi City, Ghulja City, Kashgar City, and Hotan City, from the viewpoint of sociolinguistics. A questionnaire survey, interviews, and participant observation were employed as the research methodologies. The data on the language ability of Uyghur women was collected and analyzed according to occupation, degree of education, age, as well as by linguistic contact, language usage at home and outside the home, and according to the characteristics of skills in reading, watching, and writing. The results of this survey clarified that the common language of the majority of Uygur women at home is their mother tongue, Uyghur. There was large variation in the degree of language usage outside the home. In terms of reading, watching, and writing, both differences and commonalities were found in the usage of languages.

Key words: Xinjiang, China, language, multi-ethnic society, Uyghur women